

『複雑な環境』

《要約》

市場経済を生き抜くであろう『環境』と付き合うために

第一章と第二章

『環境』は、社会的な環境、経済的な環境など、貴方を取り巻く周辺・外界の一部ではありません。

一方で、貴方を取り巻く周辺・外界からの情報は、常々変化しながら五万とあります。特に、社会性動物である人間が創り出した外界、知・技・権・財による人間界は、自然界の摂理・規範と異なる規範・規制の秩序で、ガイアが育んできた遺伝子を超越する欲求・欲望を求めて、その界での弱肉強食を繰り返しています。

特に、市場経済はそのものが複雑系を形成して、もはや人の手に負えない、飼い主を噛む犬のように人間界に君臨しています。

第三章と第四章

貴方を取り巻く周辺・外界の変化は、貴方も参加しながら複雑系の様相で進展しています。その系の中に居て、環境だけを考えても、100人100様の捉え方があります。全ての人々が満足する快適な環境像は存在しません。

何故ならば、環境を考える足元の外界には、多元・多様、森羅万象の数(多様)と外界・大外界の関係性の数(多元)との積の価値観があって、しかも環境自身も、三間の広がりによる「ゆとり量」で曖昧性を持っているからです。

ですから、環境リスクも、何を「リスク」とするかを曖昧にして、欲求的リスクや経済的リスクを避けて通るパラダイムにあります。

第五章と第六章

結局、環境対策は、発生源が明らかな公害対策のように線形の対策ではなく、人間対策として非線形で考える必要があります。

全ての価値観や常識が織り成す流動的な錦絵の中では、それらの関係性を「ノウ・ホワット」で見た変化に、環境を織り込む工夫が必要です。ホロンの関係で変化を導くことへのパラダイム・シフトです。

この視点では、「遺伝子が心地良いと感じる範囲、生物としての安全・安心・安定のビオトープ」と、「環境(資源)効率性で得ることができる価値、物財ではなくサービス財を基盤とした生活の豊かさ」の二つが、パラダイムをシフトするバタフライになって、複雑系で機能するでしょう。

環境の貿易立国として存在し続けるためには、この二つへの進取の展開、クラスターとサービサイジングという考え方で活路開拓が有効です。環境にやさしくではありません。結果として環境が守られている、そのようなパラダイムの構築が適者生存での勝者です。